# 通訳の技術

Interpreting Skills

小松達也 著
Tatsuya Komatsu

研究社

# 通訳の技術

小松達也 著

研究社

# はじめに

「太平の眠りを覚ます上喜撰(蒸気船)、たった四杯で夜も寝られず」とうたわれたペリー提督率いる米国海軍日本遠征隊が来航したのは1853年である。200年以上続いた鎖国に終止符を打ち、わが国近代化の幕を開いたこのアメリカとの最初の接触でコミュニケーションの橋渡しをしたのは、長崎を本拠とするオランダ通詞の人たちだった。この時の通訳は、英語-オランダ語-日本語というリレー通訳で行なわれた。圧倒的な力の差のあるアメリカとの間で、何とか平和裡に和親条約を結ぶことができた陰にはプロの通訳者集団であるオランダ通詞の働きがあった。

それから約150年、グローバリゼーションの波に洗われる現代においても、通訳者の活躍は続いている。G8サミット、北朝鮮をめぐる6ヵ国協議、日米間を始めとする国家間の話し合いのような公的な会議から、経済界やビジネスにおけるさまざまな話し合いに至るまで、通訳者の果たす役割は不可欠である。特にビジネスの面では、日産自動車、新生銀行、小売業におけるウォールマート社の進出などに代表される企業間国際提携の本格的な進行によって、ビジネス通訳の需要が飛躍的に増加しつつある。また、外国人の居住者が増えることの結果として、福祉や司法など公共サービスの面でも通訳のニーズが高まっている。テレビニュースの同時通訳もお茶の間に親しまれている。

これに対して、若い人たちを中心に通訳の仕事への関心が依然として高いのは喜ばしいことである。大学の通訳クラスにも学生の人気が集まっており、通訳関連プログラムを提供する大学や大学院の数は40を越えている。民間の通訳エージェンシーが運営する通訳者養成機関もにぎわっているようだ。

それではどうしたら通訳者になれるのだろうか。通訳者に必要な技術とはどのようなものだろうか。ここでまず忘れてならないのは、通訳者はプロ

(専門職)だということである。この点では通訳者は、医者や弁護士に似ている。プロは高い能力と技術を持ち、それなりの訓練を受けていなければならない。通訳者の場合には外国語の能力と通訳技術である。通訳と英語力との関連については第2章で詳しく述べた。通訳技術とはどのようなものだろうか。通訳者にとって外国語の力は必須だが、日本語と外国語が話せるからといって、通訳者になれるわけではないことはいうまでもない。スピーカーの話の内容を正しく理解し、それを違う言葉ですみやかに、かつ分かりやすく聞く人に伝えるには高い技術が必要である。本書では、そのような通訳技術の本質と習得のための方法をできるだけ分かりやすく述べたつもりだ。

私が通訳の仕事を始めたのは大学生の時だ。原水爆禁止世界大会が最初の舞台だった。仕事の前に3、4回勉強会をやって通訳の練習をしただけで、会議にのぞんだ。当時はプロの通訳者という存在はなかったし、私自身も通訳技術を習ったことは一度もない。その後大学を卒業して、国務省嘱託としてアメリカに渡り、本格的に通訳の仕事を始めた。見よう見まねで、仕事を通してだんだん通訳の技術を身につけていった。1966年に帰国して、サイマル・インターナショナルの創設に参加した。わが国初のプロ通訳者集団の誕生であった。

その後、通訳の歴史の発展の中で、幸いにしていろいろなすばらしい通訳の仕事に従事することができた。沖縄の返還につながった日米間の話し合い、テレビや自動車などに関する日米貿易交渉は今でも記憶に残っている。サミット(主要国首脳会議)の通訳にも数回参加する光栄も得た。日米財界人会議、太平洋経済委員会などの民間の会議も私たち通訳者にとって重要な場だった。今でも現役の通訳者としてこの仕事を続けている。

このような長い通訳者としてのキャリアの中で、どうしたらいい仕事ができるだろうかといつも思案と工夫を繰り返してきた。通訳の仕事は奥の深いものである。うまくできることもあるが、これは失敗だと自分で思うこともある。ある時は、スピーカーのいうことがさっぱり分からず、ブースの中で呻吟した。その時は、言葉が分からないなら内容を知ろうと思い、彼の著作や論文を詳しく読んで何とか通訳ができるようになった。日本語から外国語である英語への通訳は、私にとっては常にチャレンジだった。いいたいこと

を自然で分かりやすい英語で表現することは、私にとって永遠の課題である。

通訳を教えることも比較的早くからやってきた。1970年頃からサイマルが自社で派遣する通訳者を育成するためにサイマル・アカデミーという通訳者養成機関を作り、私はそこで通訳の教師としての仕事もするようになった。通訳の理論や訓練法も知らなかったから、生徒にやらせてみて直す、"swim or sink"（泳がないと沈む）という原始的な方法である。基本的に「スキル」である通訳技術の習得には、この方法はそれなりに効果的である。こうして通訳訓練の面でも、自分で通訳をする経験を頼りに手探りで養成を続けてきた。この教室から多くの通訳者が育ったのは、私の大きな喜びである。

1970年代の終わり頃だったと思うが、旧知のフランス人通訳者ダニツァ・セレスコビッチ女史から1冊の本が送られてきた。今では通訳関係の本の中で古典となった *Interpreting for International Conferences* である。この本を読んで私は驚愕した。それまで通訳の仕事や通訳を教える中でいろいろ考えてきたことが、彼女の著作の中にはっきり理論的に書かれていたのだ。私はこの本をぼろぼろになるまで何回も読んだ。そこに書かれた彼女の考えは、「意味の理論」（Interpretive Theory）として知られる通訳研究の大きな流れの1つとなっている。この理論の中心は、通訳では話し手がいうことを正確に理解することが最も大切な要素だ、ということである。理解とは言葉ではなく、話し手が聞き手に伝えようとした「意味」を捉えることである。そしてそのためには言葉以外の知識が大きな役割を果たす。第4章では、理解のための方法をいろいろな角度から具体的に述べている。理解は通訳の作業のスタートであり、基本でもある。通訳の仕事をするためには、健全な理解力を身につけることが最も大切である。この章を十分学んでいただきたい。

通訳の作業の後半は、訳すことというより再表現することである。「意味の理論」では、言葉を翻訳しようとするのではなく、理解した「意味」を通訳者が自分の言葉で表現することを重視する。自分の言葉で話さなければ、流れのある分かりやすい通訳にはならない。第6章ではこのことを繰り返

し述べている。ただし、英語を外国語として学んだ私たちには、英語で自然に表現することはなかなか難しい。この章では日本語から英語への通訳に多くのページをさいて、自然な英語で表現するためのいくつかのポイントをあげた。

第4章から第6章にかけては、理解、ノートテイキング、再表現と、もっぱら逐次通訳の技術を取り上げている。逐次通訳は何といっても通訳の基本である。プロの通訳者になるためにはまずしっかりとした逐次通訳の技術を身につけなければならない。そうすれば同時通訳の技術を覚えることは難しいことではない。第8章は、同時通訳も理解したことを自分の言葉で話すという通訳の基本から逸脱したものではないという私の考えに基づいて書かれている。その上で、同時という厳しい時間的制約の中で、どうやってこの通訳の基本を実行するかを順序だてて述べたつもりだ。逐次通訳の技術を身につけてさえいれば、誰にでも同時通訳は可能である。

「聞いたことを正しく理解して、分かりやすく表現する」というのが通訳技術のエッセンスだとすれば、通訳訓練が英語など外国語力の向上に役に立つことはあまり問題なく理解されると思う。通訳技術と外国語の勉強とは別のものだという考えもあるが、通訳の仕事と外国語力向上のための努力とを切り離すことはできない。また大学を始めとする通訳関連プログラムに参加する人たちの中には、通訳者に必要とされる英語力のレベルに達しない人が多いことも事実である。私も大学で通訳を教えているが、現在の大学生の英語力からすれば、通訳者の養成というより彼らの英語力の向上に重点を置くことが中心となる。基本的な通訳技術習得のための訓練は英語力向上の面からも非常に効果的である。第9章では、通訳技術の英語学習への適用のための具体的方法に焦点を当てた。

通訳の技術を身につけただけでは、まだ通訳者になることはできない。商品が生産され、流通の経路を通してお客様に買われることによってサイクルが完成するように、通訳の仕事をするためには通訳を必要とするクライアントを知り、なんらかの形で通訳マーケットに参加しなければならない。通訳マーケットはどのように機能しているか、どのようにして最初の仕事を見つけたらいいか、といった情報も通訳者を目指す人にとっては大切である。筆

者は通訳者としてだけでなく、通訳者を派遣する企業や通訳者養成機関の経営者の業務にも長年従事してきた。この経験を生かして第10章では、通訳技術を身につけた後通訳の職業に入る手立てを具体的に述べている。

本書のもう1つの特色は、実践的な練習課題を豊富に含んでいることである。第4章から第8章に至る各章では、通訳技術の解説に加えて要約や、ノートのとり方、再表現などの実例を挙げて説明するとともに、各項目ごとに読者のみなさんにやっていただく練習問題を〈CDによる課題〉として提示している。これらの課題はすべて実際の対話や、講演会、国際シンポジウムなどでの実際のスピーチからとったものである。

通訳の訓練ではオーセンティック（authentic）で内容が興味深く、学習者のレベルに合わせた適切な難易度の教材を選ぶことが大切である。〈CDによる課題〉では学習の進行に合わせて、身近な話題についての大学生同士の対話から、国内外の専門家、経済人、ジャーナリスト、アメリカ大統領を含む政治家などによる生のスピーチを採録した。なお、オーセンティックなものから音源をとっているので、〈CDによる課題〉の中には音質が必ずしもよくないものが含まれている。通訳の練習には差し支えのない範囲内なのでご理解をいただきたい。巻末には、これら音声教材のトランスクリプトも載せてある。第4章、第8章の〈CDによる課題〉では、筆者による逐次、同時のモデル通訳が添付CDの終わりの方に収録されている。通訳にただ1つの正解というものはない。同じ正しい通訳でも、通訳者によってさまざまなバージョンがありうる。ここに示したものは筆者による1つの例である。また最初から実例を見たりモデル通訳を聞いたりするのではなく、自分で何度かやってみてから確認として利用していただきたい。

〈CDによる課題〉に収録した25編のうち5編は筆者が勤める明海大学の宮田研究奨励金の援助を得て作成した対話集からとったものである。オーストラリアからの留学生との対話も大学の教材用として作成したものだ。また4編は日本外国特派員協会（FCCJ）の "Professional Luncheon" におけるスピーチからとった。許可をいただいた明海大学およびFCCJに感謝する。その他のものの多くは筆者自身が通訳した会議あるいはシンポジウムからとっている。これらの会合の主催者、スピーカーの方々にもあわせて感謝

を表明する。

通訳は高い外国語力と幅広い知識、それに本書で展開しようとする多様な技術を必要とする専門職で、必ずしも容易な道ではない。しかし、話し合いによる国際協調なくして平和も繁栄もありえない現代においては不可欠の重要な職務である。そして何よりも、やりがいのある楽しい仕事だと確信する。本書が、この大切な分野に対する理解を深め、より多くの人が通訳技術を身につけて国際社会に貢献するきっかけとなることを希望するものである。

出版にあたっては、企画の段階から研究社編集部の杉本義則氏に大変お世話になった。氏の温かいご支援にお礼を申し上げる。

本書を通訳研究に私の目を開いてくれた故ダニツァ・セレスコビッチ女史と、私の3人の娘、潤子、亜也子、知子にささげる。

2005年8月

小松達也